

伊大老 山脇圭水 ひめゆりの塔 松井水 白虎隊 内田景水 紅葉狩 池田周水 豊川女子挺身隊 田中篁水 新撰組 稲葉 葵水 恩讐の彼方 八田夏水 光華門 一番 乗り 吉野洲水 (以下特別出演) 堅田落 京都梅原旭壽 村上喜剣 東京友吉澄水 英木 大阪山崎旭寿 西郷隆盛 東京大館 洲方 (夜) 琵琶舞 柴田勝家 内田惠水 琴出方 坂崎出羽守 吉野洲水 (以下特別出演) 小栗栖 梅原旭壽 雪の進軍 友吉澄水 曲恒平九郎 山崎旭寿 壇の浦 東京鶴田錦史 乃木將軍 大館洲方

○：復活十二年 浅野晴風演奏大会 十一月十六日 東京中野区公会堂 (主催 晴風一門会) 吟詠と門 琵琶 晴風会員 門出 浅野英子 桜狩 山口正純 乃木將軍 坂入晴峰 西郷隆盛 原島晴洲 別れの盃 青木晴城 川中島 加藤錦陽 鞍馬山 山口登水 宮本武蔵 杉山雅俊 荒城の月 緒方晴舟 掛合景清 山崎典水 大野偉水 絃 大楠公 押川旭葉 小督 浅野英子 小松の操 三 森鶴堂 俊寛 石田脩水 薩摩守 望月 宇治川 先陣 鈴木密水 粟津ケ原 山元旭錦 掛合教盛 若林晴波 山下晴楓 屋島の誓 谷野晴水 盛綱先陣 水藤錦櫻 山伏接待 浅野晴風 外に吟詠四

○：名絃琵琶大会 十一月十八日 東京日刊工業ホール (主催 邦楽名絃会) 重衡 山崎光水 偉大なる大統領 ケネディ 三上成水 小栗栖 佐藤旭天紅 琵琶無明石の上 西郷天風 立方二 城山 都錦穂 会津の華 杉山旗水 勸進帳 石田脩水 旅順開城下 遠藤鶴東 名月逢坂山 鈴木密水 鼓笛付 小敦盛 下 平田竜宗 徳川慶喜公 西郷天風 外に剣舞、舞踊各一

○：第三十八回筑前琵琶会全国大会 十一月二十二、三日 福岡電気ホール (主催 日本旭会、司会 福岡旭会) 第一日 屋郷土筑紫の賦外二十一曲、夜 吉野山懐古外二十一曲 第二日 昼 常陸丸外二十二曲、夜 秋風故郷山外十九曲、東京、名古屋、岐阜、金沢、京都、大阪、東大阪、神戸、明石、神港、姫路、尼崎、相生、備後、宇部、防長、戸畑、八幡、小倉、福岡、熊本、肥後、筑紫、諫早、長崎、鹿児島各旭会代表約五百十人出演 (舞踊、バレエ、茶点前、華点前、洋楽器、笛、箏等付)

○：第一回吟詠大会 十一月二十三日 函館ロイヤル (主催 函館吟詠連盟) 独吟合吟書道吟、茶道吟等九十九番の外 琵琶舞 踊 静の前を琵琶高橋蘇水、雅楽宮村泰次郎、立方若柳次胤で披露

○：武絃会第六十七回研修会 十二月八日 小金井市福祉会館 (主催 同会) 河内の宿 異変 静軒 紅葉狩 五十嵐清華、村上清芳 七卿落 渡部喜山 月ざくら 山崎光水 竜の口 加藤喜水 二条城の清正 伊藤磐水 鐘の音 菊地甘水 吉野落 土田昇龍 白虎隊 高杉洲清 台湾入 清水源城 義士の誓 大村鼓城 物狂 坂本錦道

○：明治百年記念琵琶大会 十二月二十二日 埼玉県寄居町中町会館 (主催 寄居町文化団体連合会) 安宅の関 大井錦定 西郷隆盛 佐藤刀邦 松の廊下 遠藤鏡水 掛合石童丸 水藤五郎 小沢錦弥 絃 水藤錦櫻 白虎隊 細田錦糸 宗吾と甚兵衛 西村錦風 佐倉吹雪 原田刀水 掛合茨木 大井錦定 秋山錦賜 秋南錦霞 名月逢坂山 鈴木密水 道成寺 秋山錦賜 曲恒平九郎 水藤錦櫻 雪晴れ 東錦重 鉢形城 吉川城水

あ 明けましてお目出とうございます
と 昨年は飛んでもないショッキングな事件が沢山あった、二月に金婚老のライフル立籠り事件、三月には東京の二千万円奪略事件、六月横須賀線の列車爆破事件、十月ピストル連続射殺事件、それから十二月には銀行から運搬中の三億円という庶民には雲のような巨額のだまし取り事件、或は東大、日大など学生の自分を忘れた全国大学の学生紛争、特に十月の新宿駅騒乱事件など、どれを見ても琵琶をやる者にとってはおおよそ想像も及ばぬ大事件の連続一年であった。交通事故にしても死者一万五千、重傷八十万人という夢みだいな数字で、昭和元祿イザナギ景気といわれた裏面には兇悪犯罪や深刻な社会問題がついて廻った年であった。政治に嘴を入れる気は毛頭ないが何とかこの辺で政府のおえら方は和やかな、69であるよう考えて貰いたい。それと共に我々琵琶人も民心を善導するような琵琶を広く演奏して側面から掩護射撃をし日本人一億総平和とゆきたいものである。お正月勿々話がちょっと大きくなり過ぎたかな? 兎に角本年もどうぞよろしく。

昭和四十四年一月一日発行 (非売品)
編集者 植村 稟 水
発行所 京都市北区衣笠西馬場町二九
和田第一ビル 二〇一号
電話 八三二六 二二八七六番
内線 二〇一六番

機 器 絃 京 絃 第一七五号 京 絃 社



年 頭 の 辞



謹 賀 新 年
陳腐な挨拶であるが、これは最も簡単で而もお正月に一番ピッタリとくる文句である。敢えて使い古されたこの四文字で希望に輝く69の新年を共に祝い、併せてことし一年仲よくお互い健康で琵琶の道に進みたい。

戦後二十四年、一般邦楽は漸次戦前の隆盛復古調を取戻しつつあり、わが琵琶界も遅ればせながら之に追随しているが、未だ前途遠慮の感が深い。我等同人は奮起一番、時勢に目醒めて旧奮を脱し、技能の練磨、人格の陶冶に力を致すと共に現代に向く琵琶を喧伝しなければならぬ。即ち百年一日の如く忠君愛国を謡い、殺伐な戦争ものを力演し、或は自己陶醉の長時間ものや、素人に理解されにくい長々とした弾法などは演奏会では自戒し、老人だけでなく若い人にも興味をひくような時代に適應した新作歌詞を公開するなど、我等の努力次第で急速に発展を取戻すことが出来よう。

勿論これは演奏会など一般公開の場合の謂で、同人集会の研究茶話会等では戦争ものであろうと忠君愛国ものであろうと、乃至は思存分納得のいくまで糸を弾こうと勝手次第で、場合によっては寧ろ是等を推奨したい。筆者が提唱するのは飽くまでも琵琶人以外の人に聴かせる場合のことである。

演奏会で満員お礼の貼り札を出すのは元より結構な事に違いないが、対して何等異論はないが、戦前を懐しむ老人ばかりを集めないで、次代を荷なう若い人も統々聴きに来るようにする為にはどうしたらよいか、という点を今年に課題にして真剣に考えたいと思う。

同時に、琵琶歴何十年を誇る人達は、宝の持ち腐れとならぬよう今年に積極的に教授所を開いて男女青少年への教授指導にあたり、高齢で自然淘汰されつつある現代琵琶人の数を之によって増加し、崇高偉大な琵琶芸術を永く後世に残すよう努力して貰いたいものである。

「平家物語」の物語 (二二) 敦 盛 最 期

戦争はいつの世にも悲惨である。殺し合いという非情な現実、人間の限界、人間の心のみにくい内側さえもさらけ出させる。

「鹿も通えば馬も通う」一義経の奇襲、越の坂落しが功を奏した一の谷の戦いでもそうであった。この合戦は平家に決定的打撃を与え、平家の主な武将が次々と死んだ。越前三位通盛、弟の業盛、薩摩守忠度、武蔵守知章等々。しかし平家物語は、平家軍の主力スタップが一挙に弱体化した事実を物語るだけに止どまらなかつた。「一人一人の死の中に一つ一つの悲劇があった」と、戦争の中の人物を語りかけるのである。たとえば越前前司盛俊の最期。源氏方猪俣小平六則綱は一段は盛俊に組敷かれ哀願して助けて貰いながら、味方の来るのを見てひそかに加勢を計算して盛俊をだまし討した。そして味方が来る迄に

：熊谷あまりにいとほしくて何くに刀を立つべしとも覚えず。目もくれ心も消えはて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべき事ならねば泣く泣く頸をそ掻いてんける。後に聞けば修理大夫経盛の子息太夫致盛として生年十七にぞなられける。

首をとり、後で功名争いが起つては大変と、あわて、「盛俊討取り」の名乗りを上げる。中世武士のブライドから程遠いこの小平六も、戦場の中の生々しい一個の人間の姿だった。或は又、夫通盛の死にショックを受け身投げして果てる戦争未亡人小宰相のエピソードも、戦争の悲惨さを訴えずにはおかない。

一の谷合戦の数々の登場人物の中でも、注目したいのは源氏の武将熊谷次郎直実と、平家の生田の森の大将平知盛である。直実は嘗ては知盛に仕え石橋山の戦いには頼朝を攻めた男。それが今や敵味方、二人は直接出逢うことはなかったが同じ一の谷に居た。皮肉な運命のいたずらだったが、二人を特徴づけるのは、勇猛な武將としては意外なほど人間味が感じられることである。

熊谷直実は一の谷の先陣をつとめたもの、義経の坂落しの成果の影にかくれ、大した殊勲もたてられぬまゝ戦いの終り頃、やっつと平教盛を海辺で見つけて討つ。が、年若い教盛を見て、戦場で負傷した同じ年頃の我子小次郎を思い出して迷う。しかしどやどやと味方がやって来るので止むを得ず教盛の首を刎ねる。吉川英治氏の「新平家物語」はその時の直実を描写する。「かれ程の豪の者が然も克ちとった武勲を手に、なんでそんなにまで戦い疲れたのだろうか。やがて馬上陣屋へ引掲げてゆく姿さえ得意など全然なかった。」

章を討たれる。自分の前で然も身変りになつて殺される息子を見送つて知盛は海上へ逃げる。数々の武勲に輝く武將の誇りのかけらもない人間のエゴイズム。逃げたあと船の中、知盛は宗盛大臣に「他人の事なら歯がゆからうに我身の事となるとよくよく命が惜しかったもの」と今こそ思い知らされました。一重苦しいつぶやきだつたらう、と同時に我身の不甲斐なきを、兄という身内ではあれ総司令官宗盛の前で云えるという点でも、知盛という男は変った人であった。

知盛は後壇の浦の合戦で自害する。直実は出家して法然上人に師事する。その住居跡と伝える熊谷堂が京都市左京区の俗称黒谷金戒光明寺の山内にある。境内栗原の丘の中腹、静かな信仰の世界のたゞずまいが四辺を包む。蓮生法師、直実の法号にちなんだ蓮池の水は静かで動かない。すぐ近くの勢至堂に真実と教盛の供養塔が左右に並んでいる。

切抜帳から (三六)

平井春嶺

○終戦の真相 (一四)

九、終戦に対する八月九日の御前会議の状況と大御心の有難さ (2)

御前会議は八月九日夜十一時から開かれま

謹賀新年

宮崎直二

東京都世田谷区太子堂町
二丁目二番八号
電話 (41) 六五七八番
郵便番号 154

列席者は総理・外務・陸軍・海軍の四大臣、陸軍参謀総長、海軍軍令部総長、平沼枢密院議長、七名が正規の構成員でありまして、陪席員は私、陸海軍の軍務局長、内閣総合計画局長官の四名、合計十一名であります。正規構成員七名の中現存者は豊田軍令部総長だけあります。

会議場は官中防空壕内の一室で約十五坪程のお室でありました。地下十米であります。一同席について陛下をお待ちしました。陛下は足取りも重く、お顔は上気したる如くにて、入って来られました。

今も深く印象に残っておりますのは髪の毛が数本顔に垂れておられたことです。会議は総理が司会致しまして、先づ私がポツダム宣言を読みました。日本に耐え難い条件を読むのでありますから全く堪まらないことでした。次に外相が指名されて発言しました。その論旨はこの際ポツダム宣言を受諾して戦争を終るべきであるという言葉を静か

に阿南陸軍大臣は、外相の意見には反対でありますと前提して、荘重に涙と共に今日迄の軍の敗退をお詫びし、併し今日と言えども、必勝は期し難しとするも必敗としまつてはいない。本土を最後の決戦場として戦うに於いては、地の利あり人の和あり死中に活を求め得べく、若し事志と違ふときは日本民族は一億玉砕し、その民族の名を青史に止むることこそ本懐であると存じます、と言われま

した。次に米内海軍大臣はたった一言、外務大臣の意見に全面的に同意でありますと言われま

した。次に米内海軍大臣はたった一言、外務大臣の意見に全面的に同意でありますと言われま

した。平沼枢密院議長は列席の大臣、総長にいろいろ質問されたのち、外相の意見に同意であると言われま

した。この間約二時間半陛下は終始熱心に聞いて居られましたが、私はほんとうに至近の距離で陛下の御心配気なお顔を拝して涙のじみ出るのを禁じ得ませんでした。

一同の発言の終ったとき、私はかねての打合せに従って総理に合図しました。総理が立ちま

した。陛下は総理に對し席に帰って居るようにと仰せられましたが、総理は元來耳が遠いためによく聞き取れなかつたらしく、手を耳にあてて「ハイ」という風にして聞きなおしました。この間の図は聖天子の前に八十の老宰相君臣一如と申しますか何とも言えない美しい情景でありました。

総理は席へ帰りました。(以下次号)

謹賀新年

池上作三

東京都板橋区板橋二丁目
二十一番四号
郵便番号 173
電話 (961) 一一〇〇番

隨筆

近頃憶うこと(その五)

長 浜 南 城

旧は邦楽に琴、尺八がある。何れも時代の流れに乗って新曲のリズムが加味されて、昔聴いた琴、尺八とは感覚の新しいものへ移動しつつある。

省りみて琵琶と云えば古めかしいイメージが強く、何処の会場のプログラムも十年一日の如く新鮮味に欠け、聴衆の心を捕える事が仲々困難である。特に琵琶は歌が聴衆の心に

沁み、感激と感動を与えねば意味がないので、只耳で聞くだけの音楽に比べると、琵琶の良さを判らせる事が一入困難である。

昔の正絃会は一晚十名以下の出演者であったが、最近は一晩三十名に近い演奏会であるから、司会者も出演者もなるべく十分か十五分以内にとめた歌と、気の利いた必要なだけの弾法を工夫し、素人にも玄人にも判る演奏に切替える努力が望まれる。

狂醉亭漫録(四十四)

古 谷 寛 水

明治百年の会には出来るだけ明治時代の内容を持つプロに取捨選択する様な司会者側の心づかいなども必要かと思われる。要は琵琶人の時代感覚が一新されるセンスが要諦である。時代の流れに従って飽くまで判りやすい曲を選び、演出効果を充分あげる事に努めたものである。



昭和己酉歳旦、先づ御慶を申上げる。本稿も当初芸談的隨筆の予定で執筆した処意外の方向に脱線し、結局史実の追求を主眼とする結果に成ったが、之も琵琶界諸賢の御参考にもと思ひ、七十五歳の老軀に鞭打って敢えて統稿の筆を執る決心だが、目下進行中の赤穂

謹 賀 新 年

錦心流琵琶

一水会大阪支部

事務所 大阪府羽曳野市高鷲三丁目

五ノ一〇 馬瀬水方 郵便番号 583

電話(〇七五)四八四四番

顧問 東 飯 塚 憲

理事 尾 山 好 豊

理事 小 川 吟 水

理事 木 村 蓮 水

副支部長 佐 々 木 寒 水

支 部 長 中 田 鳳 水

支 部 長 藤 原 匠 水

支 部 長 古 瀬 英 水

支 部 長 馬 田 渚 水

支 部 長 松 岡 東 水

支 部 長 米 沢 正 水

支 部 長 吉 田 柳 水

支 部 長 高 嶋 正 水

支 部 長 木 原 正 水

支 部 長 桃 原 正 水

支 部 長 高 嶋 正 水

支 部 長 水 水 水

支 部 長 水 水 水

支 部 長 水 水 水

錦心流琵琶

一水会神戸支部

神戸市生田区山本通四丁目七ノ五 蔵本司水方 電話(〇七五)一七四九番 郵便番号 650

柴 田 旭 堂

神戸市葺合区上筒井五丁目五二 電話(〇七八)二六一番 郵便番号 651

一水会富山支部
田 中 愛 水
田 中 歴 水

錦びわ宗家
水 藤 錦 穰
東京都練馬区旭町三ノ二二ノ四 郵便番号 176 電話(930)四四九八番

錦心流琵琶・詩吟

蓮 水 会

西宮市羽衣町七ノ三四 郵便番号 662 電話西宮(33)五八八七番

井 上 碧 水

生 島 華 水

反 町 紫 水

山 県 吟 水

長 谷 川 蓮 水

荒 木 吟 水

小 倉 吟 水

竹 内 吟 水

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

詩 吟 部 一 同

事件中の大石と云う大人物の輪廓を描くのみ
にでも資料山積し、毎回一頁の短文に要約し
ても何時まで続くか予測出来ず、只々望洋の
嘆あるのみである。

赤穂城明渡の日時は、下見分の翌日の元祿
十四年四月十九日朝卯之刻即ち午前六時から
と決定された。正受城使二人の内、播州龍野
の城主脇坂淡路守安照は一隊の軍を率いて前
夜八時過赤穂に到着、大手方面の町家を本陣
にして物々しい軍容を示し兵威は四辺を払っ
た。又他の一人備中足守の城主木下肥後守利
康も同じく一軍を従えて十九日早曉到着し、
搦手を押し陣を張った。

前夜大石は士卒を励まし「方々の職分は此
一夕に候ぞ」と戒め、守城の人々に徹夜させ
て諸門を固め、火の用心遣る所無く注意し、
仍て大石は大手の櫓に登り、脇坂の本陣を打
眺め莞爾として傍に向い「脇坂の陣備え美事
なり、さり乍ら世は元龜天正に非ず、攻城守
城時と変化あり、今此陣に的幟を連ね高張を
耀されるは標的此に在りと示すに異ならず、吾
等当初の決意を示し、是より石火矢を連放すべ
掛けんには一挙にして彼の陣は骨破徹塵に成
らん」と私語いた。山鹿流の蘊蓄である。

享保三年、片島武矩は義臣伝中之を評し
「一世の人を觀るに、上は呂望孔明の戦術陣
法に則り、下は孫武呉起の奇正節制を学習し
徒に思を広遠に馳せて、未だ心を近世の兵学
に用いる者あらず、既に孫武の拙速とする所
も火攻十三篇に決せり、況や当時の大砲連城

謹賀新年

日本伝統芸能同好会々々長
日本民主同志会中央執行委員長

松本明重

京都市東山区祇園町南側
万寿町五七〇
電話(661)三三七七八二番
郵便番号 605

錦心流琵琶大阪織水会本部
会長 広瀬 緻水

大阪府枚方市上島東町四番
郵便番号 573

左記の通り昭和四十三年十一月
十六日付を以て昇伝致しました。
お見知り置き下されたくお願い
致します。

- 皆伝 広瀬 穎水
- 皆伝 中西 鏡水
- 奥伝 浜野 知水
- 奥伝 中野 淀水
- 奥伝 杭東 詠水

引き続き本年二月十一日付にて
教師。皆伝。奥伝十名の昇伝を
一水会本部へ申請の予定でござ
います。よろしくお頼み申し上
げます。

砲の神速なるものに於てをや、良雄の眼最も
高しと謂つ可し」と、大石を評するに亦絶妙
の言である。

然し相手の脇坂侯も暗愚では無く、既に大
石の肚裏を読了していたのである。此時に一
つの逸話がある。赤穂家中に萩原兵助、同儀
左衛門の兄弟あり、共に大野党であったが、
強慾無比で、隣藩にも比類少き富裕者であり
器物什具も数多所蔵し、その中大砲二門あり
る事を聞いた脇坂侯は窃に家臣を遣わし高価
を以て之を買取り対陣の備えに用いたとある。
この萩原兄弟の不臣さは早々赤穂城内諸士
の知る所となり、一同の激怒を買ったが大石
の鎮める所となり、後日神崎則休は之を筆誅
し、醜名は後世まで貽された。

四月十九日午前六時、受城使の使者により
愈々受渡の実行が求められた。因より覚悟の
上、内蔵助は諸士に号令し、一時に城門を押
開かせた。只見る二正使副使二知郡事を始
め両侯の軍隊は肅々と乗込んだ。一方は大手
の三の丸、他方は搦手の塩谷口、東総門、西
総門、川口門から西仕切門、刎橋門を始め、
門々櫓を固めたる赤穂藩士は一々之を両侯の
士卒に引渡せば、入代って此処には脇坂家、
彼処には木下家の士足輕共が主人顔して警備
する。仍て大石奥野の二人は、正副四使二知
郡事を本丸の大広門に請じ、豫て整頓せる諸
記録諸簿冊を公式に捧げ、茲に謹んで「本城
を御引渡し申上げる」との意を述べた。一同
は今更の如く感動し、就中正使の両侯は今日

謹賀新年

井上兼子

京都市伏見区深草瓦町
電話(4)四八二〇番
郵便番号 612

薩摩琵琶高昇流家元

泉勝院峰 口高昇

和歌山県白浜温泉浜通
白良ヶ丘
郵便番号 649の22
電話 二三六八番

錦心流一水会々々員
同 輝絃会々々員
武絃会事務所

伊藤磐水

東京都小金井市本町一丁目八ノ五
電話(小金井)二三三八一三番
郵便番号 〇三三三八一三番

鈴木 鉦次郎

東京都北区田端町一五三
郵便番号 1114
電話(821)六六六二番

熊木 菫水

川越市南通町一四六の一
電話(川越)二二四六〇番
郵便番号 3510

榎本 芝水

東京都世田谷区代沢二ノ
電話(467)〇八二八三番
郵便番号 1555

竹下 翠風

東京都杉並区下高井戸
電話(303)五八九四番
郵便番号 〇三三三八六番

錦心流琵琶

清水 史水

(新住所)
明石市和坂字割池谷七四九
郵便番号 673

ところとなり、月照と共に追われる身となった。これを聞いた近衛家では、西郷を呼び出して月照を薩摩にかくまうよう依頼し、薩摩に帰薩させたが、久光の保守的意見の下、薩摩は佐幕の傾向に変わっており、西郷や月照を容れるに消極的であり、ついに日向に行くよう命ぜられた。

元来、薩摩では日向送りは長送りと称し、国境で殺害されることになっていた。西郷はこれを承知していたから、藩庁のこの処置を以て断固決意した。

安政五年十一月十五日夜半月の下、船は鹿児島を出帆した。月照に対しては、船中で藩庁の意向を西郷は伝えざるを得ない。従容として月照は決死の意向を答え、十六日の暁天、同船していた平野次郎や、月照の従者重助等も知らぬ間に船上に出て、西郷と相抱いて薩摩の海に入水した。意外な水音に驚いた平野ほか舟人等は二人を救助したが月照は遂にかえらず、西郷は辛うじて蘇生したのである。月照辞世の歌が西郷の懐中から出た。

「くもりなき心の月も薩摩灣

沖の波間にやがて入りぬる」

「大君のためには何か惜しからん

さつまの瀬戸に身は沈むとも」幕府の捕吏には、罪人の死体を西郷として、検視をすまして責任をのがれた。そして西郷は大島に一時身をかくすことになったのである。(以下次号)

謹賀新年

天津旭八千代

大阪市城東区蒲生町一ノ七七
電話(931)二二五二番
郵便番号 536

鈴木誉士

東京都練馬区豊玉北五ノ一
郵便番号 176

上梨将水

名古屋邦楽協会
岐阜邦楽研究会
岐阜市西改田笑福町
電話(582)二〇九八番
郵便番号 501

小沢錦弥

東京都荒川区荒川三ノ一
電話(03)三〇七〇番
郵便番号 110

主幹 西脇和義

名古屋市中村区水主町一ノ三
野村ビル三〇一
電話代(582)五八八一番

鈴木叫水

名古屋市昭和区向山町
電話(51)七九七四番
郵便番号 466

松谷了玄

富山県水見市幸町
郵便番号 935
電話(72)二二〇八番

竜馬を斬った男

二橋 凡羊



NHKテレビの人気番組「竜馬がゆく」の坂本竜馬は慶応三年十一月十五日夜刺客のため、親友中岡慎太郎や下僕の藤吉と共に暗殺された。犯行現場から通り一つ隔てた土佐藩邸から急を聞いて馳せつけた人々によって、犯人の追及がなされたが判明しなかった。然し十一ヶ所の重傷を負いながら翌日夕刻迄生きていた中岡慎太郎の証言と、現場に残っていた刀の鞘などから、新撰組の仕業であることが確認された。

竜馬ほどの剣の達人を、不意を襲ったとはいえ容易に暗殺した犯人は果たして誰であったろうか? 遂に誰とも判らずに明治維新を迎えたのである。

幕府動乱の時代には暗殺や斬り合いは日常茶飯事で、明治新政府は総て不問に附したが、竜馬暗殺の追求のみは執拗に続けられた。事件当時の現場の証拠や、勝れた剣士の集っていた新撰組が犯人と目され、明治元年になってから千葉の田舎で捕えられた隊長近藤勇は、土佐藩士ら官軍将校によって、取調べも受けずに死刑に処せられてしまった。

所がその後同じ新撰組隊士で人斬名人と云われた大石次郎が捕えられ、彼の自白によって竜馬暗殺の真犯人は、見廻組隊士の今井

謹賀新年

中島眞水

京都市東山区松原通大和路
東入弓矢町五五一一八
電話(541)九〇九一番
郵便番号 605

北尊水

鎌路市栄町五ノ二
郵便番号 085
電話代表 ②五二七〇番

田中篁水

金沢市天神町二丁目六ノ十二
電話(076)五三三八番
郵便番号 920

大井錦淀

埼玉県大里郡寄居町玉淀
郵便番号 369の12
電話(0485)八二七四〇番

秋元旭晨

大阪市東区法円坂町
法円坂住宅二〇号ノ五
電話(941)六六二七番
郵便番号 540

星野崖水

秋田市土崎港中央四丁目
九番二十六号
郵便番号 011
電話(5)〇三二一番

伊藤金次郎

鎌路市北大通五ノ六
電話(2)二四七三番
郵便番号 085

東憲水

喪中に付年賀欽礼
大阪市東成区大今里一ノ八三
郵便番号 537

信郎と判明し、明治二年五月逮捕され取調べを受けた。彼は旧幕海軍奉行榎本武揚の率いる幕府軍の最後の抵抗隊に加わり函館にいたが、その降参人の中に今井は居ったのである。竜馬暗殺の後、京都見廻り組(主として旗本の二男、三男の中から剣道の達人を選び結成した治安維持の検察隊)の隊長佐々木唯三郎は、特に選んだ六人の隊士をつれて、かねて追跡中の竜馬の隠れ家近江新助宅を襲った。「私は階下に見張りに立ち、三名の者が二階に上って斬ったので直接の下手人ではない」と今井は最後迄犯行を否認し続けたので、証拠不十分と重ねて恩典のため禁固という軽い判決で、当時静岡に移っていた徳川藩に引渡された。それというも暗殺団の他の六人の内戦死四人、行衛不明二人で反証を求めることが出来なかったのである。

今井信郎は天保十二年三河譜代の直参旗本の家に生まれ、江戸で剣を学び入門後三年にして免許皆伝となり、幕府師範代に抜擢され特に小太刀の妙技は評判であった。その腕を見込まれて慶応三年京都にのぼり、見廻組と力頭任にせられたが、鳥羽伏見の戦で見廻組が全滅したあと江戸に逃がれ、函館軍に参加した。

榎本武揚は非常に進歩的な政治家で、北海道民主共和国を独立させるという考えで、政府の要人を選挙で決めた。そして今井は陸海軍裁判長という要職に選ばれ、明治になって静岡県下の一村長となり、村に塾を開いて子弟の教育につくしたが、ふとした機会に京都時代の友人元新撰組隊士結城無二三の息子礼一郎(当時甲斐新聞主筆)から真実を話して呉れとせがまれ、始めて竜馬を刺した男が自分であるということを告白したのである。

謹賀新年

平素はお世話になって居ます
今年も相変らずよろしく御願
申上げます

松岡旭岡

伊藤旭暢

西宮市二見町一ノ二
郵便番号 662

稲葉葵水

名古屋市昭和区島西町二ノ七
電話 (741) 四〇三四番
(731) 八二八四番
郵便番号 466

錦心流一水会名古屋支部長
中部琵琶連盟副理事長
尾州葵会々々長

筑前琵琶

師範藤卷旭鴻

東京都豊島区高松三ノ一二
電話 (955) 三六四五番
郵便番号 1771

頼三樹三郎



吉水錦翁作
柿本錦城改訂

国の為には身を忘れ 月や花にも意もとめぬ
頼三樹三郎幼にして 後藤松陰に従いて
文の林の奥深く 道より道を分けて入る。嘉
永六年アメリカの 使節浦賀に渡り来て 碇
を下ろし其日より 皇國の内はさながらに
かなえの沸くが如くなり」三樹三郎思うよ
う 糧に乏しきこの都 もしも軍さの起りな
ば 軍兵共を始めとし 人皆飢に及ぶべし
いざ先づ糧を求めんと 同じ心の人々と 謀
りし事も鳥が鳴く 東の司に支えられ 尽す
心は鴨川の 水の泡とぞなりにける」 早や
此時は掛巻くも 長き刃りは浦々の 港を鎖
し 醜夷らを 追払わんと唱えられ 幕府は彼
が乞いを入れ 互いに市を開かんと 云い争
いて公論は 二つに別れ夏の日の 蟬の声よ
り 喧し」 露英其他の強国も われおとら
じと波を蹴り 押寄せ来れば三樹三郎 今ほ
猶予もなり兼ねて 粟田口の親王に 夜昼と
なく討幕の 事を細かに勧めしが 小簾間澳
るは月花を 語ろう声にあらずとて 吾妻
の司逸早く 搦め捕ってぞ江戸に送る」三
樹三郎は因の 数には入れど真心は 我日の
本の行末を 思い思いて玉と散る 涙は袖に
降る雨と 共に掛りて旅衣 乾すいとまさえ
なき内に 東の方に着きにけり」 獄吏厳し

謹賀新年

西村峽水

函館市柳町三ノ一五
郵便番号 040
電話 (51) 七九七九番

仲川秀邦
旭朋

東京都中野区中央一丁目
三二ノ六
電話 (361) 七七四〇番
郵便番号 164

函館吟詠連盟
錦心流琵琶

高橋蘇水

函館市大手町一六ノ一〇
電話 (22) 〇七五〇番
郵便番号 040

錦水会派薩摩琵琶

錦城柿本吉郎

東京都台東区駒形
郵便番号 二ノ四ノ八
電話浅草(841) 五二〇二番

く戒めて よりく罪を問ひ糺す 三樹声を
 励まして 我は父の遺訓を守り 只一筋に勤
 王の 志をば抱くのみ 汝等心に省みて 早
 く眠りを覚まさずば 立ち処に亡して 皇御
 国を清めんと 練め争うその声は 文天祥が
 その昔 折れず携まぬ勢いも 斯くありけん
 と目の前に 見る心地して勇ましき」 さて
 此人を免しては 風もそよがぬ武蔵野に 虎
 を放つに異ならず 疾く無き者になさんとて
 抜く手も早き太刀先の 閃く様は冬枯の 浅
 茅ヶ原の草の葉に 置く霜よりも尚白く 時
 雨に染みし紅葉ばの たぐいならねど大丈夫
 が 散りて行くこそ悲しけれ」

盛会を極めた三浦蓮水 十一月三日腹郁
 琵琶と詩吟舞大会 たる菊の香りが満
 ちた西宮市立夙川公民館松下ホールに於て明
 治百年記念を兼ね西宮市文化祭参加の恒例第
 七回蓮水会錦心流琵琶と詩吟舞大会が開催さ
 れた。絶好の秋晴れに恵まれて聴衆は開演一
 時間前から続々詰めかけ定刻正午開演時には
 既に会場半ばを埋め二時頃には超満員で来聴
 者は廊下にはみ出し用意した四百人分のおみ
 やげに不足を来たし臨時追加に追われる有様
 であった。当日の演奏者と曲目は前号「よも
 やま」欄記載の通りで琵琶、詩吟、舞の何れ
 もが上出来で満場を沸かせたが特に詩舞「小

楠公の母」(吟三浦蓮水、立方青柳流詩舞家
 元青柳芳枝と門下)、琵琶舞「絵本鏡山」
 (琵琶三浦、立方青柳)など豪華絢爛で万雷
 の拍手が鳴り止まなかった。終演後松野紫雲
 氏の挨拶、記念撮影の後懇親宴が別室で開か
 れ和やかに歓談を尽くし目出度散会したのは
 九時、星空の下冷気が肌によく感ぜられた。

盛会であつた一水会 十一月十六日大阪
 大阪支部秋の大会 支部は同市太融寺会
 館大ホールで明治百年記念を兼ね本年秋の大
 会を開催したが当日は絶好の秋日和に恵まれ
 て客足も良く近年稀な盛會裡に終始し成功を
 収めた。定刻一時馬瀬支部長の開会挨拶があ
 り近來の科学文明の驚異的進展に反し精神文
 明が著しく立遅れ寧ろ後退を示す畸形さなが
 らの現代世相に鑑み心の豊かさを求める一環
 として抜本的な情操教育の必要性から、忘れ
 られた日本人特有の落付きを取戻すよすがの
 一助に古來の琵琶音楽普及の要を強調、併せ
 て率先協力を要望して直ちにプロの順序によ
 る演奏を開始(前号「よもやま」欄参照)し
 たが何れも熱演で頗る好評、特に本日の呼び
 物の本部役員桑原敬水師の「西郷隆盛」の一
 曲は研鑽を尽した絃の冴えに乗る精練を極め
 た音声の強弱曲折は流石胸打たるゝものがあ
 り斯界随一の声さえ事実耳にした程であった。
 七時終演記念撮影に続いて小宴に移り存分に
 歓談と余興が交わされ九時頃和氣霽々裡に散
 会となった。(繪水記)

賀正

足立 芦光
 東京都太田区南千束町
 一丁目二〇ノ一六
 市来 芦村
 電話 ② 三三四八番
 ③ 三三四四八番
 高妻 芦豊
 西宮市大谷町七ノ一

賀正

正派鶴声風薩摩琵琶
 日本吟詠鶴声流正吟会
 伴野 鶴風

静岡市沓谷三丁目一九三ノ二
 電話 (54) 九四四四番
 郵便番号 420

因に当日は東京一水会本部秋嶺水福会長来
 演予定のところ急病の爲右桑原敬水師代つて
 来演された次第で秋副会長の一日も早き快癒
 を祈つてやみません。
 清水史水氏 神戸百寿会顧問大関源藏
 百寿会で演奏 氏が今般電氣業会功労者と
 して勲五等に叙し双光旭日章を授けられその
 祝賀会が十一月二十四日午前七時から百寿会
 会員約五十人が集まって鉄拐山道場で開かれ
 清水史水氏が自作「祝大関源藏先生叙勲」の
 一曲を演奏し主賓と列席者に多大の感銘を与
 えた。

京都琵琶協会 十二月七日(土)午後一時か
 十二月茶話会 京都市北区の旧官幣大社
 平野神社々務所に於て伊吹正陽、戸倉旭嶺、
 若宮旭登、田中鵬水、中島真水、中島旭穂、
 吉野洲水、梅原旭濤、矢吹華水、木村維水、
 水内凝水、美登里進水、平井春嶺、植村真水
 の諸会員出席、師走にちなみ期せずして義士
 ものなどの演奏が続いたあと今回新たに入会
 の小林旭光氏を平井幹事長が紹介し食事を共
 にしながら忘年会、新年会、来月例会等の相
 談や茶談に花を咲かせて八時、本年掉尾の定
 例茶話会をなごやかに閉幕した。

○京都琵琶協会一月定例茶話会 一月十五

日(休)午後一時千本出水西入徳雲寺(当番幹事
 古谷寛水、木村維水両氏)同好者の御来遊飲
 迎。
 ○初春琵琶名流演奏会 一月九日午前十一
 時東京日本橋三越劇場(四百円)
 ○針谷錦古一門新春発表会 一月十五日午
 後一時高崎市公民館 初謡い初弾き
 (転) 居)
 ○山之内兼光氏 大阪府枚方市養父丘二丁
 目七ノ一〇七
 ○広住秋水氏 静岡県焼津市中新田一七一
 八ノ二へ

よもやま (敬称略)

○全国大会出演者激励前琵琶演奏会 十
 一月十日東大阪枚岡大社々務所(主催東大
 阪旭会) 蓬萊山一中沢旭洋・絃旭操、旭
 粧、旭暢、旭山 加羅の兜!東大阪代表中
 沢旭楓・絃旭操 玉藻の前!尼崎代表辨本
 旭波・絃旭操 老公漫遊!神戸代表樋口旭
 総 加茂の宵月!大阪代表山本旭紅 常陸
 丸!河本旭藤 橘中佐!東大阪代表辨本旭
 風 羅生門!岡田旭蓮、京都代表若宮旭登
 大橋公!神戸代表木庭旭山 小栗栖!東大
 阪代表中沢旭洋・絃旭岡 誉の水馬!西川
 旭操 大物の浦!原島旭粧 若き敦盛!伊
 藤旭暢 君ヶ代!実岡旭操 塚原ト伝!松
 岡旭岡
 ○日本琵琶楽名人大会 十一月十六日昼福
 井市人絹会館 夜鶴江市々民会館(主催吉
 野洲水後援会)(昼)千曲川!山本重吉
 吉野回顧!梅田光童 城山!戸田頌水 井

賀正

琵琶
 錦古流詩吟

針谷 錦古

高崎市岩鼻町局前
 電話 高崎 ④ 二〇〇六番
 郵便番号 370の12

賀正

鈴木 密水

埼玉県越谷市東方二三九二
 電話 ④ 〇八七 ④ 四二五〇番